

# 英語 as 叙述構文の認知的考察

長谷部 陽一郎

## 1. はじめに

本稿では、認知言語学の立場から as 叙述構文 (as-predicative construction) を取り上げ、話者がこれを用いて対象をどのような認識のもとに言語化するかについて考える。そして、as 叙述構文が、事態に対する認識を、主に「可能性」、「行為」、「結果」という3つの観点から言語化する構文であることを示す。[動詞 + X + as + Y] という形式を持つ as 叙述構文で用いられる動詞の多様性や構文としての意味の拡がりを精査することは、英語における主観性やカテゴリー化の問題に光を当てることにもつながる。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節では as 叙述構文の形式的・意味的特徴を概観し、この構文が、認識や見立てを一般化・客体化する形式として幅広い用法を持つことを示す。次に3節では、as 叙述構文のプロトタイプ的意味について考える。Gries et al. (2005) はコーパスを用いた調査に基づき、as 叙述構文の意味の拡がりを分析した。本稿では COCA、TED Corpus、WordNet という3種のデータを用いた調査により、彼らの分析をあらためて検証する。これをふまえ、4節では「可能性」、「行為」、「結果」という3つの段階的概念と関連づけることで、as 叙述構文に対する包括的な記述の枠組みが得られる可能性を示す。最後に5節で全体のまとめを行う。

## 2. as 叙述構文の形式的・意味的特徴

### 2.1 分析の対象となる構文の定義

本稿では [動詞 + X + as + Y] の形式をとる構文を as 叙述構文と呼び、考察の対象とする。ここで X には名詞句が、Y には名詞句、形容詞句、もし

---

『コミュニカール』10 (2021) 1-20

©2021 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会

くは非定型節のいずれかが生じるものとする<sup>1</sup>。(1)はその具体例である<sup>2</sup>。

- (1) a. The country had been run by a ruler revered *as* a king early in this century.  
b. Laura both hated anyone she identified *as* spoiled.  
c. He regards himself *as* having been somewhat shabbily treated by Luke.

*as* 叙述構文では (2) のような [as + 前置詞句] の形式もあり得る。

- (2) He regards it *as* entirely at odds with the historical character of the surroundings. (Gries et al. 2005: 638)

しかし、[as + 前置詞句] 形式の *as* 叙述構文は他の形式と比べて少なく、形の上では前置詞句であってもイディオムとして一体化していることが多い。そこで本稿では [as + 前置詞句] の形式を [as + 形容詞句] の一種として扱う。一方、形の上では [動詞 + X + as + Y] であっても、(3) のような例は分析対象に含めない。

- (3) a. He lost his career *as* a firefighter.  
b. They won it *as* a family.

(3) では、*as* 叙述が、目的語要素に対する見立てでなく、主語要素に対する見立てを示しているため、(1) や (2) で表される事例群とは区別される。

## 2.2 一般化・客体化された認識の表示

認識や見立ては視点を伴う。*as* 叙述構文の場合、基本的に動詞の主語の視点からの見立てが表現されるが、そこにはいくつかのパターンがある。

- (4) a. I revere Mr. Smith *as* a role model.

- b. They regard Mr. Smith *as* a role model.
- c. Mr. Smith is used to being respected *as* a role model.

(4a) では話者自身が視点となっている。(4b) は話者以外の特定の主体の視点をとっている。(4c) では不特定の主体の視点からの見立てが表現されている。認識や見立ては本来一人称的な営みだが、*as* による叙述が発話の主体 (= 話者) からの視点に制限されることはない。すなわち、それは一般化・客体化された認識の表示である。

また、*as* 叙述構文で表される認識は様々なレベルの事実性 (factuality) を伴う。次の (5) を見てみよう。

- (5) a. The Japanese government categorizes Bitcoin *as* a legal payment option within the country.
- b. President Trump regards the news media *as* an enemy.
- c. The younger generation uses Facebook *as* a business card.

いずれも何らかの認識や見立てを表す文であるが、(5a) が示すのは、政府が表明する「事実」としての事態認識である。一方 (5b) が示すのは、米国大統領である主体の個人的な認識—より正確にはそれに対する発話者による観察—である。そして (5c) が示すのは、特定の事態に対し、あくまでアナロジー的なものとして提示された「見立て」である。

このように、*as* 叙述構文は認識や見立てを一般化・客体化して示す言語表現であり、認識の視点の定位や、内容の事実性については可変的である。それゆえに *as* 叙述構文は様々な動詞と共に、多様な内容を表す構文として広く用いられている<sup>3</sup>。Gries et al. (2005) は、そのような多様性の中にプロトタイプ・カテゴリーとしての性質があることに着目し、コーパスを用いた調査と分析を行った。次節では Gries et al. (2005) の分析を紹介し、異なるデータを用いた新たな調査の結果をもとに、検討を加えていく。

### 3. as 叙述構文のプロトタイプの意味について

#### 3.1 ICE-GB を用いた分析

Gries et al. (2005) はコロストラクション分析 (collostructional analysis) の手法を用いて、as 叙述構文に現れる様々な動詞のコロストラクション強度 (collostructional strength, CS) 値を計算し、as 叙述構文と最も結びつきやすい動詞をリスト形式で示した<sup>4</sup>。また、そこから as 叙述構文のプロトタイプの意味を抽出することを試みた。

コロストラクション分析の特徴は、ある語彙素と構文との組み合わせが数多く観察される場合でも、その語彙素が別の構文と高頻度で出現する場合には対象を過大評価せず、出力値の大きさを制限する点にある。これにより、語彙素の単なる生起頻度ではなく、分析の対象となっている構文との相互選好性 (mutual preference) を適切に評価することが可能になる。

CS 値は次のように求められる。まず、考察対象となる構文 C と共に現れる語彙素を全てリストアップする。次にそれぞれの語彙素 W について、構文 C の共起頻度、W 以外の語彙素と構文 C の共起頻度、C 以外の構文と語彙素 W の共起頻度、W 以外の語彙素と C 以外の構文の共起頻度という 4 つの値を求める。これらの値をフィッシャーの正確検定 (Fischer's exact test) を元にした公式に適用して得られるのが CS 値であり、これが大きいほど、構文 C と語彙素 W の相互選好性が高いと考えられる。Gries らはコロストラクション分析の手法を ICE-GB (British Component of the International Corpus of English) から得たデータに適用し、様々な動詞と as 叙述構文との CS 値を算出した。表 1 は、CS 値を降順で並べた動詞リストの上位 30 語を示したものである (Gries et al. 2005: 649)<sup>5</sup>。

表 1 によると、as 叙述構文と最も高い相互選好性を示すのは regard である。総頻度 (= コーパス全体の中で出現する頻度) と観測値 (= as 叙述構文と共起する頻度) について regard より大きい値を示す動詞もあるが、CS 値は regard の 166.48 が最大である。このことから Gries らは「regard は、as 叙述構文と最も強く関連付けられる要素であり、as 叙述構文の意味性質を圧縮したような内容を持つ」と述べる (Gries et al. 2005: 652)。また、(6) に示す 7 つの動詞群を設定し、as 叙述構文が regard を最もプロトタイプの

表 1 : ICE-GB を用いた調査の結果 (Gries et al. 2005)

順位	動詞	総頻度	観測値	CS	順位	動詞	総頻度	観測値	CS
1	regard	99	80	166.48	16	class	5	3	5.92
2	describe	259	88	134.87	17	denounce	7	3	5.38
3	see	1,988	111	78.79	18	dismiss	25	4	5.16
4	know	2,120	79	42.80	19	consider	264	9	5.08
5	treat	92	21	28.22	20	accept	178	7	4.47
6	define	83	18	23.84	21	name	41	4	4.28
7	use	1,228	42	21.43	22	portray	19	3	3.96
8	Vlew	41	12	17.86	23	advert to	4	2	3.84
9	map	23	8	12.80	24	diagnose	6	2	3.44
10	recognise/-ze	114	12	12.16	25	think of	206	6	3.21
11	categorise/-ze	10	6	11.53	26	depict	8	2	3.17
12	perceive	28	6	8.30	27	cite	9	2	3.06
13	hail	4	3	6.32	28	rate	9	2	3.06
14	appoint	35	5	6.07	29	train	40	3	2.98
14	interpret	35	5	6.07	30	cast	41	3	2.95

な要素とした放射状カテゴリーとして考えられることを示唆している<sup>6</sup>。

(6) a. 認知を表す動詞

regard, know, recognize, consider, think of

b. 知覚を表す動詞

see, view, perceive

c. 発話行為を表す動詞

describe, define, portray, hail, denounce, depict

d. 分類を行う動詞

categorize, class, diagnose

e. 主観的な把握を表す動詞

interpret, take

f. 一時的な属性付与を行う動詞

use, treat

g. 役割・ステータスの付与を行う動詞

appoint, nominate, adopt, establish

(Gries et al. 2005: 653)

このように、Gries et al. (2005) は as 叙述構文の特徴について、コーパスと統計的な手法を用いて、興味深い結果を示した。しかし、ICE-GB は 100 万語レベルの小規模なコーパスであり、そこから Gries らが得た as 叙述構文の事例数は 687、共起動詞のタイプ数は 107 に過ぎない。一部の動詞の総頻度と観測値はかなり小さく、彼らの考察が妥当であることを確かめるには、異なるデータを用いた調査が必要である<sup>7</sup>。このような背景のもとに、筆者が行った 3 つの調査とその結果を次に示す。

### 3.2 COCA を用いた調査

第 1 の調査は、5 億語以上の規模を誇る COCA (Corpus of Contemporary American English) を利用した調査である。COCA のデータは統語解析が行われていないため、Gries et al. (2005) と同様の形での事例抽出と、CS の算出が難しい。そこで、as 叙述構文のうち、[他動詞 + 名詞類 + as + 形容詞類] の形式を持つ下位構文に絞り、MI (mutual information) 値を代替指標として用いることにした<sup>8</sup>。

CS 値と同様に、MI 値はある要素と別の要素との相互選好度を測る指標である。MI の算出にあたっては、それぞれの要素の総頻度と共起頻度、それにコーパスの総語数が用いられる。MI では、計算の性質上、観測値が小さくてもコーパス全体での総頻度が小さければ上位にランクする可能性がある (石川 2012)。そこで今回の調査では観測値 (= 共起頻度) が 10 以上の語のみを対象とすることによって、そうした要素を排除するよう試みた。結果として得られた動詞リストの上位 30 語を示したものを表 2 に示す。

表 2 では Gries らの上位リスト (表 1) に出てきた語に網掛けを施している。Gries et al. (2005) における上位語の多くが、順位は異なるものの、COCA を用いた調査でも上位を占めている (14 の動詞タイプ)。

しかし、表 2 の結果は次の問題を提起する。Gries et al. (2005) は、regard のコロストラクション強度が最大であることを根拠に、as 叙述構文のプロトタイプの意味は regard のそれと一致すると論じた。しかし、コーパスの種類や規模が異なれば、必ずしも同じ結果にはならない。条件が異なるとは言え、COCA を用いた本調査の上位 3 語は、portray, dismiss,

表 2：COCA を用いた調査の結果

順位	動詞	総頻度	観測値	MI	順位	動詞	総頻度	観測値	MI
1	portray	10,294	224	5.89	16	interpret	13,778	70	3.79
2	dismiss	12,593	231	5.64	17	treat	50,232	251	3.76
3	denounce	4,006	61	5.37	18	condemn	7,221	36	3.76
4	perceive	19,152	278	5.30	19	define	38,748	191	3.74
5	categorize	2,790	40	5.28	20	view	124,905	593	3.69
6	classify	6,859	90	5.16	21	certify	3,164	15	3.69
7	regard	31,989	335	4.83	22	tout	4,287	15	3.25
8	decry	1,253	13	4.82	23	strike	53,304	177	3.17
9	characterize	13,266	122	4.64	24	accept	55,641	171	3.06
10	construe	1,454	12	4.49	25	reiect	20,118	57	2.94
11	designate	5,178	37	4.28	26	advertise	5,116	14	2.89
12	conceptualize	1,606	11	4.22	27	envision	6,333	17	2.87
13	depict	10,979	73	4.17	28	label	23,457	60	2.80
14	describe	81,316	452	3.92	29	appoint	10,824	27	2.76
15	posit	2,040	11	3.87	30	identify	62,579	151	2.71

denounce という、認識や見立てを表すだけでなく、付随する行為についても述べる語である。このことをふまえると、regard が as 叙述構文と共起する動詞として代表的であることは事実だが、より確実に言えるのは、この構文のプロトタイプの意味が「対象の認知・認識」にあるということであろう。このことは、別のデータを用いた調査結果からもうかがえる。

### 3.3 TCSE を用いた調査

第 2 の調査では、約 400 万語の英語プレゼンテーション・トランスクリプトを収録した TCSE (TED Corpus Search Engine) を用いて、Gries et al. (2005) と同様の形で as 叙述構文を抽出してコロストラクション分析を実施した<sup>9</sup>。TCSE に格納されているのは TED Corpus のデータ、すなわち TED Talks (<https://ted.com>) の約 2,000 件の英語プレゼンテーションのトランスクリプトであり、基本的に話し言葉のデータである。その点で、話し言葉と書き言葉のテキストを含んだ均衡コーパスである ICE-GB とは性質を異にする<sup>10</sup>。しかし、TED Talks の多くは明確なテーマを持ち、よく準備

されたプレゼンテーションであるため、書き言葉に近い性質もある程度有している。

TED Talks をコーパスとして用いることの注意点としては次の2点が挙げられる。第1に、多様な言語的背景を持つスピーカーによる発話を含む点である。実際のところ、英語を母語としないスピーカーによる発話も多数みられる。しかし、英語という言語の多様性と国際性を考えると、COCA や BNC などによる調査に加えて、「多様な英語」を含んだデータを用いた調査を行うことにも一定の価値がある。第2に、聴衆を前にしたプレゼンテーションという特定の状況での発話データを用いている点である。ただし、この点は、用法基盤モデル (usage-based model) を掲げる認知言語学の枠組みでコーパスを用いる際の利点ともなり得る (cf. Langacker 2000, Tummers, et al. 2005)。表3に調査の結果 (上位30語) を示す。

TCSE で得られた as 叙述構文の事例数は2,632、共起動詞のタイプ数は239であった。表3で網掛けを施しているのは、Gries et al. (2005) のリスト (表1) にも出てきた語である。11 という一致語数は、COCA を用いた

表3: TCSE を用いた調査の結果

順位	動詞	総頻度	観測値	CS	順位	動詞	総頻度	観測値	CS
1	think of	991	377	Inf	16	cite	23	6	4.61
2	refer to	115	60	61.90	17	list	62	9	4.42
3	describe	504	101	56.01	18	write off	4	3	4.13
4	view	140	49	40.13	19	redefine	59	8	3.78
5	define	315	55	27.61	20	classify	32	6	3.75
6	regard	41	24	26.83	21	conceive	46	7	3.69
7	perceive	154	39	26.09	22	construe	6	3	3.45
8	treat	506	62	22.44	23	reframe	15	4	3.26
9	use	6,411	297	19.79	24	talk of	9	3	2.85
10	look upon	8	7	10.13	25	label	63	7	2.85
11	dismiss	32	10	8.17	26	envision	34	5	2.71
12	herald	7	5	6.46	27	dub	10	3	2.70
13	brand	13	6	6.28	28	characterize	40	5	2.39
14	identify	276	23	5.73	29	certify	26	4	2.33
15	recognize	492	31	4.90	30	manifest	27	4	2.27



調査の結果より小さいが、30 語のうち特に上位の語が Gries らのデータとの一致を示している (think of, describe, view, define, regard, perceive, treat, use, dismiss, recognize, cite)。上位の語に関してこうした一致が見られることは、話し言葉や書き言葉といった使用域の違いを超えて、一部の動詞が as 叙述構文と強く結びついていることを示唆する。

しかし、ここでも COCA を用いた調査の場合と同じことが言える。すなわち、相互選好性を示す値 (CS) が最も大きいのは、Gries らが「as 叙述構文の意味性質を圧縮したような内容を持つ」と評した regard ではない。regard を代表的な要素として取り上げること自体は妥当であっても、regard が as 叙述構文との選好性において常に最上位に来るわけではない。したがって、特定の語だけをカテゴリーの中で特別なものとして捉えることには、ある程度慎重になるべきと考えられる。

#### 3.4 WordNet の意味カテゴリーを用いた調査

COCA と TCSE を用いた調査の結果から、as 叙述構文の意味の拡がりを考えるにあたっては、必ずしも単一の語ではなく、共通の意味的性質を持った動詞で構成される「クラスター」を重視することが適当と考えられる。そこで、as 叙述構文の共起動詞の意味カテゴリーに関する補足的な調査を行った。

英語の概念辞書 WordNet は、動詞を 15 の意味カテゴリーに分類している<sup>11</sup>。TCSE を用いた調査で得られたすべての as 叙述構文事例の共起動詞を基本形に変換し、それぞれの WordNet における意味カテゴリーを取得して集計した<sup>12</sup>。表 4 は全 239 の動詞タイプ (総事例数 2,632) に対し行った処理の結果を観測値の合計順に示したものである<sup>13</sup>。

表 4 において、タイプ頻度と観測値 (生起頻度) の両方で際だっているのは cognition (タイプ頻度 42、観測値 926) と communication (タイプ頻度 58、観測値 354) のクラスターである。観測値のみに関して言うなら、perception (観測値 419) も大きな数字を示している。Gries らによる ICE-GB からのデータに基づく分析では、as 叙述構文の共起動詞として最もプロトタイプ的と言えるのは、regard に代表される「認知」を表す動詞で、そ

表4: WordNet 意味カテゴリーを用いた as 叙述構文共起動詞のクラスター

WordNet 意味カテゴリー	タイプ 頻度	観測値	動詞タイプ例
verb.cognition	42	926	<u>think of</u> , <u>view</u> , <u>regard</u> , <u>categorize</u> , <u>know</u> , <u>consider</u> , <u>diagnose</u>
verb.perception	9	419	<u>see</u> , <u>perceive</u> , look upon, display, present, show
verb.communication	58	354	<u>describe</u> , <u>portray</u> , <u>hail</u> , <u>denounce</u> , <u>nominate</u> , refer to
verb.consumption	2	298	<u>use</u> , utilize
verb.social	21	175	<u>appoint</u> , <u>establish</u> , <u>treat</u> , brand, register, boycott
verb.possession	15	132	<u>adopt</u> , dispense, consign, sell
verb.stative	18	113	<u>define</u> , redefine, personify, uphold
verb.creation	26	102	<u>depict</u> , recast, model, erect, reinvent
verb.contact	20	49	reframe, throw back, entrench, deposit
verb.motion	7	31	usher in, ship, bring, run
verb.change	12	20	accrue, devalue, condense
verb.emotion	4	6	revere, warship, want, like
verb.competition	4	6	battle, protect, attack, play with
verb.body	1	1	revive
verb.weather	0	0	

れに see や perceive など「知覚」を表す動詞と、describe や portray など「発話行為」を表す動詞が続く。したがって、TCSE のデータと WordNet の意味カテゴリーを用いた表4の結果は、Gries et al. (2005) の分析と一致すると言える。

表4で下線を施しているのは、Gries らによる (6) のリストで例示されている語であるが、多くの語が表4でも上位に来ていることがわかる。WordNet の意味カテゴリーは動詞に対して、意味の多義性や共起情報を考慮しないで一律の基準で付与した属性であるが、それでも、regard に代表される「認知」を表す動詞を中心としたプロトタイプ・カテゴリー（ないしは放射状カテゴリー）を思わせる分布が表4の結果にも現れている。

本節の3.2と3.3で示した新たな調査の結果は、regard という語が他の語に比して特別な値を示すわけでないことを明らかにした。それでも、as 叙述構文のプロトタイプの意味として regard が内包する「対象への認識」の意味を想定することは妥当であり、WordNet を用いた補足的な調査はその

ことを裏付ける。Gries et al. (2005 : 652) は、regard を「as 叙述構文の意味的性質を圧縮したような内容」の語として特別視したが、実際には、共通した性質を持つ動詞群が集成的に形成するプロトタイプ・カテゴリー全体に目を向けることが重要である。

では、様々な動詞との共起によって実現される as 叙述構文の「意味」は、どのような基盤の上に生じているのだろうか。次節では、多様な意味が as 叙述構文という 1 つの形式で言語化されることの背後にある認知の一端を探る。

#### 4. as 叙述構文の認知的基盤

##### 4.1 事態に対する認識と見立ての 3 つのアスペクト

3 節の調査結果は、as 叙述構文の意味がプロトタイプ・カテゴリーであることを示すと同時に、いくつかの意味的クラスターを含んでいることを示唆する。ここで着目したいのは、これらのクラスターが、事態の異なるアスペクトに対応している可能性である。事態に対する認識や見立てが生じる段階を大きく分けると、事態を「可能性」として認識する段階、「行為」が遂行される段階、そして、「結果」としての状態が生じる段階という 3 つのアスペクトを設けることができる (Langacker 2002, 2009)<sup>14</sup>。

この分析を Gries et al. (2005) が示した (6) の 7 つのカテゴリーに適用して図式化すると図 1 のようになる。構文の異なる用法の間に明確な境界線を引くことは必ずしも簡単でない。それぞれの間には連続的段階性—いわゆるグレイディエンス (gradience)—がある。しかし、ある程度便宜的にであれ、異なるクラスターを設け、クラスター間の関係性を探ることで、as 叙述構文が形成するプロトタイプ・カテゴリーの全体像がより明瞭になると期待できる。このことから、以下では、3 つのアスペクト「可能性」、「行為」、「結果」について、その特徴と相互の連関を論じる。

##### 4.2 「可能性」としての認識

話者にとって as 叙述構文を用いる動機の 1 つは、要素に対する新しい見立ての方法や道筋を聞き手に提供し、これを共有することである。そのよう

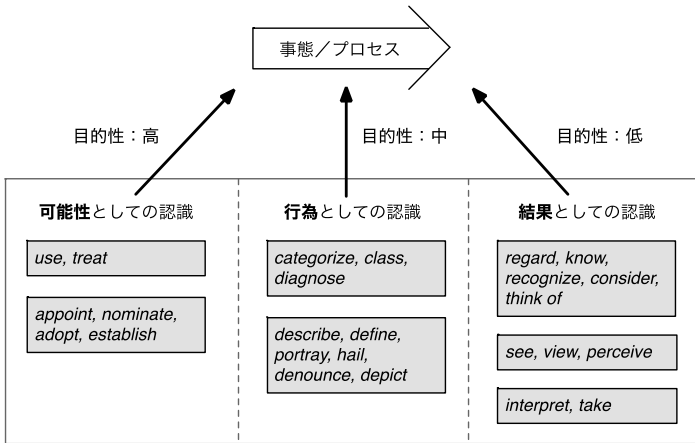


図1：as 叙述構文に関わる3つの認識のアスペクト

な as 叙述構文は「可能性」のアスペクトに対応する。この種の用法で用いられる動詞クラスターの典型的要素は use であり、(7) がその例である。

(7) We can *use* stevia *as* a sweetener.

(8) We can *use* stevia to sweeten drinks.

その特徴としては、(8) のように to 不定詞句を用いた表現と談話的な機能の面で近いことが挙げられる。(8) では to sweeten drinks によって、「飲料を甘くする」という行為が明示的に表現されており、ニュアンスは異なるものの、それは実質的に (7) に近い働きをする。このように「目的性」を含意する to 不定詞表現との対応関係が見られることは、use やそれに類する動詞と共起する際の as 叙述構文が、「可能性」のアスペクトに着目した認識の表現であるという分析の裏付けとなる。

なお、use を用いた as 叙述構文の例には、ある種のアナロジー的発想—すなわち「あるモノを別のモノに見立てる」発想—を反映した表現がしばしば見られる。(9) と (10) は TCSE からの例である。

(9) So we were *using* the body *as* really the catalyst to help us to make lots of new bone.

(Molly Stevens: A new way to grow bone)

(10) We know that cartoons can be *used as* weapons.

(Patrick Chappatte: The power of cartoons)

(9) は、骨を作る細胞培養のための媒体として人の身体を用いる医学的アプローチの可能性について述べている。また、(10) では、政治的な論争の中でマンガを武器として用いる可能性について述べている。

もちろん、事態を「可能性」として見立てるためには、それに先立つ経験が何らかの形で必要である。また、(9) の時制は過去であり、それにも関わらず、こうした場合の用法を「可能性」というラベルで説明することには違和感を覚える向きもあるかもしれない。しかし、ここで言う「可能性」とは、あくまで動詞で表される事態の実現に向けての可能性であり、実際の時間的推移の軸とは独立していることに注意されたい。

#### 4.3 「行為」としての認識

次に取り上げるのは、何らかの「行為」が遂行され、その結果、命題にある種の事実性が備わることを含意するような *as* 叙述構文である。このような事例で用いられる動詞の 1 つの典型は *categorize* である。

(11) The European Medicines Agency *categorizes* sunscreens *as* cosmetics.

(11) に見られる *as* 叙述構文の役割は、聞き手に対し、問題となっている要素が属するカテゴリーを示すことである。4.2 で見た *use* と共起する *as* 叙述構文の例と異なり、この種の見立ては、いったん聞き手との間で共有されたならば、それ以降はある種の事実性を帯びる。*use X as Y* という言明は必ずしも  $X \in Y$  を含意しないのに対し ( $\in$  はカテゴリーの成員とカテゴリー

の関係を表すものとする)、categorize X as Y という言明は (実際にそれを真とみなすかどうか、受け入れるかどうかは別として) 命題内容的には  $X \in Y$  を含意することになる。

「可能性」としての用法と同様、多くの場合、この種の as 叙述構文の as 句は to 不定詞句に置き換えることが可能であり、例えば (12) のような表現を目にすることは珍しくない。しかし、こうした to 不定詞句が表すのは主体による見立ての内容を記述・定義したものであり、そこに use の場合のように明確な目的性が生じる度合いは相対的に低い。

(12) The European Medicines Agency *categorizes* sunscreens to be cosmetics.

ここで「目的性」の属性を、as 叙述構文のプロトタイプの意味とは独立した外的属性として捉えるならば、この点に関して「可能性」の用法に比べて希薄である「行為」としての用法は、as 叙述構文のプロトタイプの意味により近づくものと見なすことができる。

#### 4.4 「結果」としての認識

最後に、regard などの動詞を伴う (13) のような as 叙述構文の用法について考えよう。

(13) The journalist *regards* Snowden *as* a spy.

この種の as 叙述構文の用法は、一見すると、「行為」としての用法と違いがない。行為としての用法の場合と同様に、as 以下を to 不定詞に置き換えることは、やや不自然さを伴うとしても、(14) から分かるように一応可能である。

(14) The journalist regards Snowden to be a spy.

しかし「可能性」の用法と「行為」の用法との間に、(to 不定詞への書き換えによって明らかになる) 目的性における違いがあるのと同様、「行為」の用法と「結果」の用法にもやはり違いがある。

(15) のように、「行為」用法の as 叙述構文には、目的性を有した to 不定詞句を付加することができる。一方、regard や consider と共起する、「結果」の as 叙述構文に目的性を有した to 不定詞やそれに類する表現を付加することは、(16) から分かるように一定の困難を伴う<sup>15</sup>。

(15) The company *describes/categorizes* their products *as* cosmetics to avoid any customer confusion.

(16) ?The journalist *regarded/considered* Snowden *as* a spy to complete a reportage consistent with his client's views.

as 叙述構文のプロトタイプ的な意味は、本来的に主観的な営みであるところの認識や見立てにあり、これをそのままの形で表現する「結果」の用法においては、動詞によって表される内容に目的性や意図性を結びつけることが簡単でない。それが、(15) に比べて (16) の容認度が低くなる要因であると考えられる。

3節で示したコーパス調査から分かる通り、as 叙述構文は共起する動詞の性質によって、いくつかの意味的クラスターを構成する。しかし、その全体がプロトタイプ・カテゴリーとしてのまとまりを持つならば、そうしたクラスター間の関係は、共通の認知的要因のもとに説明できるものと考えられる。そこで本節では、as 叙述構文の意味の拡がりには事態認識の中で焦点化されるアスペクトの違いが関わっており、これを適切に捉えることが、この構文の特質について一貫した記述を行うために有効な方法となり得ることを示した。

## 5. まとめ

本稿では、[動詞 + X + as + Y] の形式を持つ as 叙述構文を取り上げ、

英語の話者が様々な対象をどのような見立てのもとに言語化しているかという問題の一端を、量的な調査と質的な分析の両面から考察することを試みた。2節では as 叙述構文が「一般化・客体化された認識と見立て」の表現であることを指摘した。3節では、Gries et al. (2005) が ICE-GB コーパスを用いて示した考察に対し、COCA、TED Corpus、WordNet のデータを用いた新たな検証を試みた。そして4節では、as 叙述構文の様々な事例が構成する複数の意味的・語彙的クラスターの認知的基盤について考察した。

これらの調査と分析により、1) as 叙述構文の事例は Gries et al. (2005) が論じるようにプロトタイプ・カテゴリーを構成するが、その特徴は単一の共起動詞ではなく、ある種の性質を共有した動詞のクラスターによって集合的に規定されるべきものであること、そして、2) 複数の動詞クラスター間の関係性を、事態の「可能性」「行為」「結果」という3つのアスペクトの観点から統一的に捉えられる可能性のあることが明らかになった。

## 謝辞

本研究は科研費（基盤 C：18K00670）の助成を受けたものである。

本稿の内容の一部は第13回国際認知言語学会（2015年7月）と成蹊 CAPS プロジェクト第4回研究会（2016年3月）で発表した内容に基づいている。それぞれの発表の後、複数の研究者からコメントを頂き、意見交換を行う機会があった。この場を借りて感謝申し上げたい。本稿に誤りが含まれるとすれば、すべて筆者自身の責任である。

## 注

1. ここで形容詞句には動詞の過去分詞形も含まれる。また非定形節は基本的に -ing の形をとる。
2. 特に記載のない場合、本稿の例文は Google 検索で得られる表現を一部加工して用いている。
3. 本稿では「共起」という語をやや特別な意味合いで用いる。共起とは通常、要素 A と B とが近接した位置で生じることを言うが、本稿では構文 C の構成要素として語彙素 W が現れる場合、すなわち要素間に近接関係でなく包



撰関係がある場合も共起と表現する。

4. コロストラクション分析の詳細な方法については Gries et al. (2005) の他、英語学研究におけるコーパスと統計的な手法の利用について論じている石川他 (2020: 第2章) を参照されたい。
5. ICE-GB の詳細については Nelson et al. (2002) を参照のこと。
6. Gries et al. (2005) は放射状カテゴリー (radial category) という術語それ自体は用いていない。(6) に示した7つの動詞群については、“The following verb clusters are presented in the order of the collocation strength of the item most closely associated with the construction (Gries et al. 2005: 653)” と述べている。なお、Goldberg (1995) 以降、構文が Lakoff (1987) が言うところの放射状カテゴリーとしての性質を持つという認識は認知言語学および構文文法において共有されている (Goldberg 1995: 227, Croft and Cruse 2004: 272)。
7. Hampe (2014) は ICE-GB のデータに BNC の一部を加えたデータセットを用いて、基本的には Gries et al. (2005) と同様の結果が得られることを示している。
8. COCA の詳細については Davies (2010) を参照のこと。
9. TCSE は <https://yohasebe.com/tcse> から利用可能である。TCSE と TED Corpus の特徴については Hasebe (2015)、長谷部 (2018)、石川他 (2020) を参照されたい。本文中で TCSE で利用可能な TED Talks の件数は約 2,000、相互数は約 400 万語と記しているが、これは調査実施時の数値であり、2020 年 10 月の時点で TCSE で利用可能な TED Talks の件数は 3,000 件を超えており、総語数は約 700 万語となっている。
10. 本論文の査読者の 1 人から、3.2 の表 2 で示した COCA の調査結果で as 叙述構文との共起語として上位に来る動詞は、強く書き言葉としての性質を示しているのではないかという指摘をいただいた。その可能性について検証するには、COCA における as 叙述構文の事例を話し言葉と書き言葉の別に分けて再集計することが必要となる。これは Gries et al. (2005) でも本研究でも行われてない。as 叙述構文の分析だけでなく、他の様々な構文を考える上でも重要な視点であり、今後の課題として検討する必要がある。
11. WordNet の詳細については Fellbaum (1998) や、公式ウェブサイトを参照のこと (<https://wordnet.princeton.edu>)。
12. 構文に共起する動詞をグループ化するために WordNet の意味カテゴリーを用いた先行研究としては、Perek (2015) の動能構文 (conative

construction) に関する研究がある。

13. WordNetにおいて1つの動詞に複数のカテゴリーが付与されている場合、最も主要なカテゴリーとして記載されているものについてのみ集計を行った。
14. Langacker (2002, 2009) は、事態の概念化には、可能性 (potential)、行為 (action)、結果 (result) といった異なるアスペクトが関わっており、そのことが多くの言語現象に反映されていることを論じている。また、この種の認知モデルをコントロール・サイクル (control cycle) と呼んでいる。
15. “We shouldn’t consider it as an opportunity to make money only” のように、as の目的語名詞句を修飾する to 不定詞を後続させることは可能だが、これは構造的に異なった構文である。

## 参考文献

- Croft, William and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Davies, Mark. 2010. “The corpus of contemporary American English as the first reliable monitor corpus of English.” *Literary and Linguistic Computing* 25(4), 447-464.
- Fellbaum, Christiane. 1998. *WordNet: An Electronic Lexical Database*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Gries, Stefan Th., Beate Hampe, and Doris Schönefeld. 2005. “Converging evidence: Bringing together experimental and corpus data on the association of verbs and constructions.” *Cognitive Linguistics* 16(4), 635-676.
- Hampe, Beate. 2014. “More on the as-predicative: Granularity issues in the description of construction networks.” *Yearbook of the German Cognitive Linguistics Association*. Berlin: Mouton de Gruyter, 207-234.
- Hasebe, Yoichiro. 2015. “Design and implementation of an online corpus of presentation transcripts of TED Talks.” *Procedia: Social and Behavioral Sciences* 198(24), 174-182.
- 長谷部陽一郎. 2018. 「TED Corpus Search Engine : TED Talks を教育と研究に活用するためのプラットフォーム」『英語コーパス研究』第25号, 159-172.
- 石川慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』東京：ひつじ書房.

- 石川慎一郎・長谷部陽一郎・住吉誠. 2020. 『コーパス研究の展望』東京：開拓社.
- Lakoff, George. 1987. *Woman, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 2000. "A dynamic usage-based model." In Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-Based Models of Language*, 1-63, Stanford: CSLI.
- Langacker, Ronald W. 2002. "The control cycle: Why grammar is a matter of life and death." *Proceedings of the Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association 2*, 193-220.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Nelson, Gerald, Sean Wallis, and Bas Aarts. 2002. *Exploring Natural Language: Working with the British Component of the International Corpus of English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Perek, Florent. 2015. *Argument Structure in Usage-Based Construction Grammar: Experimental and Corpus-Based Perspectives*. Amsterdam: John Benjamins.
- Tummers, Jose, Kris Heylen, and Dirk Geeraerts. 2005. "Usage-based approaches in Cognitive Linguistics: A technical state of the art." *Corpus Linguistics and Linguistic Theory* 1(2), 225-261.

## A Cognitive Approach to the English *as*-Predicate Construction

Yoichiro HASEBE

**Keywords:** constructions, subjectivity, prototype-categories, corpora

### Abstract

This paper takes up the so-called “as-predicate” construction with the form [verb+X+as+Y] and analyzes it from a perspective of cognitive linguistics. It attempts to critically review the corpus-based analysis by Gries et al. (2005), introducing a series of newly conducted studies using diverse datasets including COCA, TED Corpus, and WordNet. As a result, the present paper argues, firstly, that the *as*-descriptive construction constitutes a prototype category, as also stated by Gries et al. (2005), but that its characteristics should be collectively defined by clusters of co-occurring verbs that share certain properties, rather than by a single frequent verb. Secondly, it suggests that the relationships between multiple verb clusters can be viewed in a unified way by distinguishing and comparing three different aspects of the conceptualizer’s cognization of an event; that is, aspects of event cognization focusing on 1) estimation of possibility, 2) undergoing action, and 3) consequential state.